神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 集団間状況下での社会的投射プロセスに関する理論的検討


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2014-03-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田村, 美恵, Tamura, Mie<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1811 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 集団間状況下での社会的投射プロセスに関する理論的検討

田　村　美　恵

## 1. はじめに

私たちは、自分と同じ集団（内集団）に所属する他者に対して、何となく親しみを感じ、また、「自分とよく似ている」と感じることが多々ある。こうしたことが生じる理由の 1 つに、「社会的投射（social projection）」と呼ばれる認知的傾向が挙げられる。これは、私たちが、自分自身の属性（行動傾向や態度、性格特性など）を、自分が所属する内集団の他のメンバーに半ば自動的（automatic）に投射してしまうことによる。（Clement & Krueger, 2002; Krueger, 2007; Krueger, Acevedo, & Robbins, 2006）近年、社会的投射は、「人種」や「性別」「所属大学」といった自分に馴染みのある既知の集団に対して生じる（e.g., Krueger & Clement, 1994; Krueger & Zeiger, 1993; Spears & Manstead, 1990）だけでなく、実験室的に作り出されたその場限りの新奇な集団に対しても生じることが多くの研究で分かってきた（e.g.,Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Garmzow & Gaertner, 2005; Gramzow, Gaertner, & Sedikides, 2001; Otten, 2002; Otten & Wentura, 2001）。

一方、その過程で明らかになった重要な現象の 1 つは、社会的投射が、内集団に対してのみ一貫して生起するということである。すなわち、内集団のメンバーに対しては、自己と同様の属性が投射される（以下、ポジティブ投射）一方、自分が所属していない外集団のメンバーに対しては、社会的投射が抑制されたり、時には、自分自身の属性とは正反対の属性を投射したりする（以下、ネガティブ投射）といった現象がしばしば見出されている（e.g., Cadinu & Rothbert, 1996; Clement & Krueger, 2000, 2002; Gramzow et al., 2001; DiDonate, Ullrich, & Krueger, 2011; Mullen, Dovidio, Johnson, & Copper, 1992;  for review, Robbins & Krueger, 2005）。このような「集団間非対称性」が生じるのは何故だろうか。従来の多くの研究は、それが「どのように」生じるのか、その現象型に焦点を当ててきた。一方、本稿では、それが「なぜ」生じるのか、そのプロセスについて、これまでに提出されているいくつかのモデルを中心に理論的検討を行う。

## 2. 集団間状況下での社会的投射プロセスに関する諸モデル

社会的投射における集団間非対称性について、近年、最も精力的に検討を行っているのは、Riketta ら（Riketta, 2005, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）である。彼らは、集団間非対称性が生じるプロセスにおいて、認知者が内集団と外集団の関係性をどのようなものであると認知するか――集団間関係性認知――が重要な役割を担うと指摘する。具体的には、内集団と外集団が協調的関係にあると認知されれば、自己の属性は、内集団とともに、外集団にも投射されるが、集団間が競争的関係にあると認知されれば、社会的投射は、内集団と外集団を差異化／対比する方向で行われ、内集団に対してはポジティブ投射が見出される一方、外集団に対しては、ポジティブ投射が見出されなかったり、内集団とは逆にネガティブ投射が生じやすくなったりするとされる。実際、集団間関係性認知を独立変数として検討した Riketta らの一連の研究（Riketta, 2005, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）では、このような予測と完全に一致しているわけではないものの、かなりそれに近い結果が得られている。以下では、Riketta ら（Riketta, 2005, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）や DiDonate et al.（2011）などに基づき、社会的投射におけるこうした集団間非対称性をよりよく説明しうると思われる理論仮説として、(1)セルフ・アンカリング／差異化（self-anchoring/differentiation）モデル　(2)認知的斉合性（cognitive consisntency）モデル、並びに、(3)帰納的推論（induction reasoning）モデルの 3 つを取り上げ[1]、各理論の妥当性について理論的検討を行う。

### (1) セルフ・アンカリング／差異化モデル

Cadinu & Rothbart（1996）に由来するこのモデルでは、集団間状況下での社会的投射が次のような 2 つのステップによって生起するとする。まず、人は、自己と内集団が一体的な関係（a unit relationship）にあると認知する程度に応じて、自己の属性を内集団に投射し、内集団の属性イメージを推定する（セルフ・アンカリング）。その後、その内集団イメージと差異化／対比するかたちで、外集団に関する属性推定が行われる（差異化）。このとき行われる「差異化」は、カテゴリー化状況下で見られる「集団間差異の強調化」（accentuation; Tajfel & Wilkes, 1963）という一般的な認知傾向に起因しており、したがって、

1　Riketta（2006）では、選択的接近可能性（selective accessbility）モデル、最適弁別性（optimal distinctiveness）モデル、共通内集団アイデンティティ（common ingroup identity）モデルなどについても言及されているが、その後行われた研究（e.g., Riketta, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）では、これらのモデルの妥当性が必ずしも高くないことが示されている。このような実証的データに照らし、本稿では、より妥当性が高いと思われる 3 つのモデルについて取り上げる。

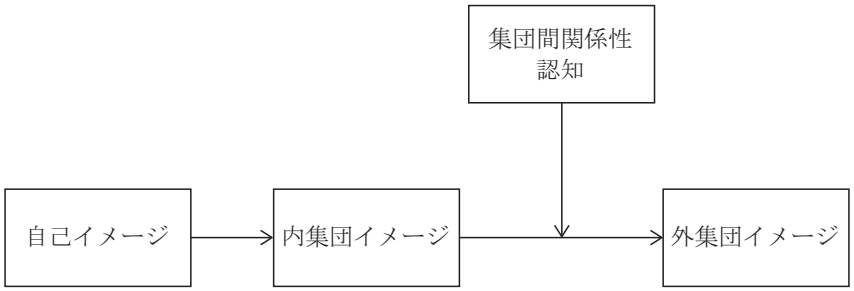


Figure 1　セルフ・アンカリング／差異化モデルのイメージ図
（Riketta & Sacramento（2008）より作成）

この差異化プロセスは、集団間状況下では、デフォルト的／ヒューリスティック（oppositeness heuristic; Cadinu & Rothbart, 1996）的に生起するとされる。

このモデルの大きな特徴は、外集団イメージは内集団イメージを媒介して（内集団との差異化を経て）形成されるとする点にある。そこでは、自己の属性イメージは、（内集団イメージを介して）「間接的」に影響すると予測されている（Figure 1）。それは、内集団イメージが、自己イメージを直接投射することにより形成されること（e.g., Clement & Krueger, 2000, 2002; Otten, 2002; Otten & Wentura, 2001）とは対照的である。

Riketta ら（Riketta, 2005; 2006; Riketta & Sacramento, 2008）によれば、このとき、外集団推定がどのように行われるかを左右するのが、集団間関係性認知である。すなわち、内集団と外集団の関係が競争的であると認知されるほど、集団間を差異化して捉える傾向が強まり、内集団ではポジティブ投射が、外集団では、ネガティブ投射が生じやすくなる一方、集団間が協調的（harmonious）であると認知されるほど、外集団へのネガティブ投射は抑制されることになる。なお、最初のステップであるセルフ・アンカリング（内集団への自己の属性投射）は、頑健で安定的に生じる自動的な認知傾向であり（e.g., Clement & Krueger, 2002; Krueger, 2007; Krueger et al., 2006; for reviews, Krueger, 2007; Robbins & Krueger, 2005）、集団間関係性認知とは独立に生じると仮定される（Riketta & Sacramento, 2008）。

### （2）認知的斉合性モデル

このモデルは、集団間状況下での社会的投射を認知的斉合性への動機づけという観点から説明するものである。認知的斉合性理論の一つである Heider（Heider, 1946, 1958）のバランス理論を応用した Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott（2002）らの仮説“unified theory”が代表的である。

認知的斉合性理論では、一般に、人は、ある態度対象に対する態度／心情的

関係を、それと関連して既有している他の対象に対する態度／心情的関係と斉合性・一貫性を保つように認知／構成する傾向があるとする。もしそれらの間に認知的な斉合性が保たれていない場合には、不快感や緊張が喚起されるため、対象間の心的な結びつき（ユニット関係）を弱めたり、ある対象に対する心情的関係を（例えば、ポジティブからネガティブへ）修正したりすることにより、認知構造全体の均衡を図ろうと動機づけられる（Heider, 1946, 1958）。

Greenwald et al.（2002）は、こうした認知的プロセスが集団に対する社会的投射においても生じるとする。すなわち、人は、自己の属性を、自分とポジティブな心的結びつきがあると認知する集団に投射する傾向があるが、それは、それが認知構造の均衡をもたらすからである。逆に、葛藤的／ネガティブな関係にあると認知する集団に対しては、認知構造の均衡を図るために、自己から距離化／差異化しようとする。その結果、そのような集団に対しては、自己と正反対の属性を投射するネガティブ投射が生じやすくなる。

このようなモデルに基づけば、内集団と外集団が競争的関係にあり、認知者が外集団に対してネガティブな感情を強く有するほど、外集団へのネガティブ投射が強く生起することになる。これに対して、内集団と外集団が協調的関係にあり、認知者が、内集団に対してと同様、外集団に対してもポジティブな感情を有するような場合には、内集団と外集団のいずれにおいても（自己の属性を投射する）ポジティブ投射が見出されると予測される（Figure 2）。

このように、認知的斉合性モデルとセルフ・アンカリングモデル／差異化モデルは、集団間関係性認知の影響については、かなり類似した結果を予測するが、一方で、この２つのモデルは、その生起プロセスについては、かなり異なった道筋を仮定している。上述のように、認知的斉合性モデルでは、内集団と外集団のいずれに対しても、自己（の属性）を直接的に投射するというかたちで属性推定が行われるとする（Figure 2）。すなわち、外集団に対する投射は、内集団イメージを媒介せずに行われるとしており、この点で、外集団に対

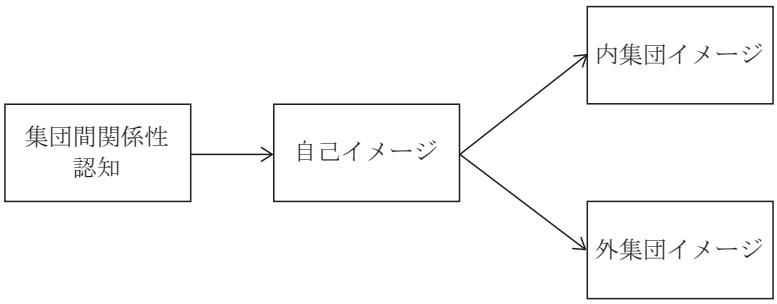


Figure 2　認知的斉合性モデルのイメージ図

する投射が内集団イメージに媒介されるとするセルフ・アンカリング／差異化モデルとは、大きく異なっている（Riketta, 2005, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）。

２つのモデルの根本的な相違点、すなわち、外集団への投射が内集団イメージを媒介するのか否かについては、Riketta（2006）や Riketta & Sacramento（2008）で検討が行われているが、必ずしも明確な結論が得られているわけではない。

例えば、Riketta & Sacramento（2008）の実験 1 では、仮想的シナリオによって実験室的に作り出した集団カテゴリー（e.g., 会社で働くプロジェクトチーム）を利用し、内集団と外集団との間で競争的関係と協調的関係を創出した。そして、17 の性格特性について、自己に関する属性推定（自己に当てはまる程度）、内集団に関する属性推定（内集団推定）、及び外集団に関する属性推定（外集団推定）を行わせ、それらの関係性について重回帰分析を中心とした検討を行っている。その結果、内集団推定においては、集団間の状況に関わらず、自己の属性を投射するポジティブ投射が一貫して見出されたが、外集団推定に関しては、集団間が競争的であるか協調的であるかによって、自己を投射する程度が異なり（協調的関係＞競争的関係）、またそれは、（部分的にではあったが）内集団を媒介することが明らかになった。こうした結果は、セルフ・アンカリング／差異化モデルと一致するものである。なお、同様の結果は、Riketta（2006）においても得られている。

一方、Riketta & Sacramento（2008）の実験 2 では、上述の実験 1 とは異なる結果が得られている。実験 2 では、現実の社会的集団（実験協力者の所属する大学の心理学科）を用いて、外集団（別の大学の心理学科）との間に、協調的もしくは競争的関係を仮想的シナリオによって作り出した。そして、実験 1 と同様、性格特性に関する自己、内集団、及び外集団についての属性推定を行った。その結果、内集団推定、外集団推定のいずれにおいても、集団間関係によって自己を投射する程度が異なっていた（協調的関係＞競争的関係）。また、外集団推定は、内集団推定と同様、自己を直接投射するかたちで行われていた。これらの結果は、実験 1 とは異なり、むしろ、認知的斉合性モデルに合致する結果であると言える。同様の結果は、Riketta（2005）でも見出されている。

これらに加え、Riketta & Sacramento（2008）では、セルフ・アンカリング／差異化モデル、認知的斉合性モデルのいずれによっても説明出来ないような結果も見出されている。それは、外集団推定において、集団間が協調的な場合のみならず、競争的な場合においても、自己の属性を投射するポジティブ投射が見出されたことである（実験 1）。先述のように、これら 2 つのモデルはいず

れも、競争的状況下では外集団推定に関して、ネガティブ投射の生起を予測している（Riketta, 2005, 2006; Riketta & Sacramento, 2008）。したがって、仮に、実験操作上、競争的関係の創出が不十分であったとしても、そこでは、ネガティブ投射が弱いレベルで見出されることはあっても、ポジティブ投射の生起は期待されない。

このように、セルフ・アンカリング／差異化モデル、及び認知的斉合性モデルに懐疑的な結果を見出している研究は他にもある。例えば、Robbins & Krueger（2005）は、集団間状況下での社会的投射を扱った 48 の先行研究についてメタ分析を行っている。その結果、内集団と外集団のいずれにおいてもポジティブ投射が生じていることが示唆された。具体的には、自己から内集団、及び自己から外集団への投射の程度を示す投射指数（自己に関する属性推定値と内集団、及び外集団に関する属性推定値との相関係数）の平均値を算出した結果、それぞれ、自己－内集団投射に関しては $r$ =.46、自己－外集団投射に関しては $r$ =.13 であった。これは、内集団推定においてはかなり強いポジティブ投射が、また、外集団推定においても（内集団よりは弱いながら）有意なポジティブ投射が生じていることを示唆している。

これらの結果は、セルフ・アンカリング／差異化モデルや認知的斉合性モデルではうまく説明出来ない。それはむしろ、以下に述べるような「帰納的推論モデル」（DiDonate et al, 2011; Robbins & Krueger, 2005）に、より合致するものであるように思われる。

### （3）帰納的推論モデル

DiDonate et al.（2011）や Robbins & B Krueger（2005）に代表されるこのモデルは、人々が、自己に関する情報（属性）を、内集団や外集団に関する推定を行う際に、一つの有効な「サンプル／手がかり情報」として利用するという前提に立っている。すなわち、人々は、「自己」という一つのサンプル情報に基づいて、（その属性を投射することにより）集団全体の性質を推測しているのであり、それは“合理的で適応的な帰納的推論”（Dawes, 1989）であるという。

その際、「自己」は、自分が所属する内集団に関しては、まさしくその集団のメンバーの一人であるという点で、内集団についての有効なサンプル情報の 1 つとなり、その結果、自己の属性を投射するかたちで内集団全体の属性が推測される（ポジティブ投射が生じる）。一方、外集団に対しても、自己の属性は投射される。というのも、外集団と内集団との間には、確かに相違点もあるが、（例えば、いずれの集団も「人間」という共通の上位カテゴリーに内包され得るという点からすれば）実際には類似性の方が大きいという予期が成り立

つからである（Clement & Krueger, 2002）。帰納的推論モデルでは、認知者がこのような集団間類似性に気づいており、したがって、自己の属性は、内集団と同様、外集団にも投射されるとする。ただし、一般に、「自己」と「外集団」との関連性（relevance）は、「自己」と「内集団」との関連性よりも小さいため（Clement & Krueger, 2002; Ward, 1967）、投射の程度は、内集団に対するそれよりも小さくなると予測される。先行研究（e.g., Robbins & Krueger, 2005）において、こうした予測と一致した結果が得られていることは、先述した通りである。

このように、帰納的推論モデルは、内集団のみならず、外集団にも、自己の属性が投射される（ポジティブ投射）と仮定する。それは、無条件に（unconditionally）生じる自動的な推論システムである（DiDonate et al., 2011; Krueger, 2007; Krueger et al., 2006）ため、投射プロセスの初期に生じる（第 1 ステップ）。その後、第 2 ステップで、外集団に対する（ポジティブ）投射が、自己と外集団との類似性／距離化の程度に応じて、意図的／積極的に抑制される（active suppression）とする（DiDonate et al., 2011）(Figure 3)。

このような帰納的推論モデルの下では、集団間が競争的な場合や協調的な場合には、どのような投射が行われることになるのか。本モデルに基づけば、集団間関係性認知は、主として第 2 ステップ、すなわち、外集団に関する投射が調整される時点に影響を及ぼすと考えられる。具体的には、集団間関係が協調的であり、外集団と自己との類似性（Ames, 2004; Jones, 2004; Stanthi & Crisp, 2010）が高く認知されるほど、外集団に対するポジティブ投射が強まり、逆に、集団間が競争的であり、外集団と自己が距離化して認知されるほど、外集団へのポジティブ投射が抑えられる（もしくは、ネガティブ投射が生起する）と予測される。一方、内集団への投射に関しては、先述のように、それは、社会的投射の初期に生起するほぼ自動的な推論システムであり、集団間関係性認知の影響をほとんど受けないと予測される。

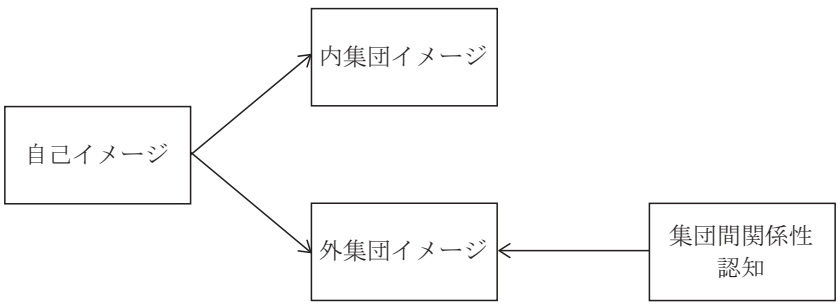


Figure 3　帰納的推論モデルのイメージ図

帰納的推論モデルに関しては、これまでに、DiDonate et al.（2011）が実証的検討を行っており、そこでは、このモデルの妥当性が主張されている。ただし彼らの実験では、内集団と外集団の関係性がほぼニュートラルな状態に保たれており、集団間の関係性が操作されているわけではない。本稿の冒頭でも述べたように、集団間状況下では、集団間の関係性によって社会的投射の現象型が異なってくる可能性が高いことを考慮すれば、今後は、集団間関係性認知を直接操作することで、本モデルの妥当性について更なる検討を行うことが求められる。

## 3.　今後の展開に向けて

これまで見てきたように、セルフ・アンカリング／差異化モデル、認知的斉合性モデル、帰納的推論モデルは、いずれも、集団間で行われた社会的投射研究の結果を一部説明はするが、すべての結果を整合的に説明しうるわけではない。Riketta & Sacramento（2008）が指摘するように、これらのメカニズムが複合的に生じている可能性もある。また、実験事態によって生起する投射プロセスが異なっているということも考えられ、その場合には、「集団間関係性認知」以外に、投射プロセス全体の生起を左右するような調整要因が存在する可能性も十分考えられる。

例えば、帰納的推論モデルやセルフ・アンカリング／差異化モデルと認知的斉合性モデルの違いの一つは、集団間関係性認知が社会的投射プロセスの早い段階で作用すると考えるか（認知的斉合性モデル）、より遅い段階で作用するかと考えるか（帰納的推論モデル、セルフ・アンカリング／差異化モデル）ということにある。後者よりも前者のほうがカテゴリー主導型（category-driven）のプロセスであるように思われるが、こうしたカテゴリー・ベースの投射プロセスは、例えば、内集団や外集団に対する強いコミットメントや感情の喚起によって牽引されるのかも知れない。気分一致効果（Bower, Gilligan, & Monteiro, 1981）に代表されるように、感情は認知に多大な影響を及ぼす。従来、社会的投射に関しては認知的メカニズムを中心に検討が行われているが、今後は、こうした感情の及ぼす影響についても視野に入れた検討が必要であろう。

社会的投射研究における重要な発見の一つは、本稿の冒頭にも述べたように、それが全く新奇な外集団に対しても容易に生じるということを見出したことである。我々は、自分の知らない集団に対しても、自己の属性（あるいはそれと正反対の属性）を投射することで集団全体のイメージを形成してしまうのである。このことは、ステレオタイプの形成や集団間差別とも深く関わる。こ

れまでの研究では、外集団と自己との類似性が高く感じられるほど（Ames, 2004）、また、距離が近く感じられるほど（Jones, 2004; DiDonate et al., 2011）、自己の属性のポジティブ投射が生起しやすくなることが分かっている。人は、己について良いイメージを抱いていることが多い（e.g., Baumeister, 1998; Diener & Diener, 1996; Taylor & Brown, 1998）ため、外集団に対して、類似性や親近性を感じるほど、自己のポジティブな属性が投射され、その結果、ポジティブな外集団イメージが形成される可能性が高くなる。では、外集団、とりわけ新奇な外集団に対する類似性や親近性の認知は、そもそもどのように形成されるのか。Turner, Crisp, & Lambert（2007）や Pagotto, Visintin, Iorio, & Voci（2013）は、外集団との接触を「想像／想定」するだけで、それが現実の接触でなくても、外集団に対するポジティブな態度変化を引き起こすことを見出している。今後は、こうした見解も視野に入れながら、社会的投射とステレオタイプの形成・変化との関連性について検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

Ames, D. (2004). Strategies for social inference: A similarity contingency model of projection and stereotyping in attitude prevalence estimeates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 573-585.

Baumeister, R. F. (1998). The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology (vol.1)*. New York: McGraw-Hill. pp.680-740.

Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. (1981). Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology: General,* **110**, 451-473.

Cadinu, M. R., & Rothbart, M. (1996). Self-anchoring and differentiation processes in the minimal group setting. *Journal of Personality and Social Psychology,* **70**, 661-677.

Clement, R. W., & Krueger, J. (2000). The primacy of self-referent information processes in perceptions of social consensus. *British Journal of Social Psychology,* **39**, 279-299.

Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 219-231.

Dawes, R. M. (1989). Statistical criteria for establishing a truly false consensus effect. *Journal of Experimental Social Pychology,* **25**, 1-17.

DiDonato, T. E., Ullrich, J., Krueger, J. I. (2011). Social perception as induction and

inference: An integrative model of intergroup differentiation, ingroup favoritism, and differential accuracy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 66-83.

Diener, E., & Diener, C. (1996). Most people are happy. *Pychologycal Science*, **7**, 181-185.

Gramzow, R. H., & Gaertner, J. (2005). Self-esteem and favoritisim toward novel: The self as evaluative base. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 188-205.

Gramzow, R. H., Gaertner, L., & Sedikides, C. (2001). Memory for in-group and out-group information in a minimal group context: The self as an informational base. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 188-205.

Greenwald, A. G., Banaji. M. R., Rudman, L. A., Farham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 3-25.

Heider, F. (1946). Attitudes and cognitive organization. *Journal of Psychology*, **21**, 107-112.

Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.

Jones, P. E. (2004). False consensus in social context: Differential projection and perceived social distance. *British Journal of Social Psychology*, **43**, 417-429.

Krueger, J. I. (2007). From social projection to social behaviour. *European journal of Social Psychology*, **18**, 1-35.

Krueger, J. I., Acevedo, M., & Robbins, J. M. (2006). Self as an sample. In K. Fiedler & P. Juslin (Eds.), *Information sampling and adaptive cognition*. New York: Guilford. pp.353-377.

Krueger, J. I., & Clement, R. W. (1994). The truly false consensus effect: An ineradicable and egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 595-610.

Krueger, J., & Zeiger, J. S. (1993). Social categorization and the truly false consensus effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 670-680.

Mullen, B., Dovidio, J. F., Johnson, C., & Copper, C. (1992). In-group ― out-group differences in social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 422-440.

Otten, S. (2002). “Me and us” or “us and them”? The self as a heuristic for defining minimal ingroups. *European journal of Social Psychology*, **13**, 1-33.

Otten, S., & Wentura, D. (2001). Self-anchoring and in-group favoritism: An indi-

vidual profiles analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 525-532.

Pagotto, L., Paolo, E. P., Iorio, G. D., & Voci, A. (2013). Imagined intergroup contact promotes cooperation through outgroup trust. *Group Processes & Intergroup Relations*, **16**, 209-216.

Riketta, M. (2005). Cognitive differentiation between self, ingroup, and outgroup: The roles of identification and perceived intergroup conflict. *European Journal of Social Psychology*, **35**, 97-106.

Riketta, M. (2006). Projection of self-attributes to outgroups. In A. B. Prescott (Ed.), *The concept of self in psychology*. Hauppauge: Nova. pp.215-241.

Riketta, M., & Sacramento, C. A. (2008). "They cooperate with us, so they are like me": Perceived intergroup relationship moderates projection from self to outgroups. *Group Processes & Intergroup Relations*, **11**, 115-131,

Robbins, J. M., & Krueger, J. I. (2005). Social projections to ingroups and outgroups: A review and meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*, **9**, 32-47.

Spears, R., & Manstead, A. S. R. (1990). Consensus estimation in social context. *European journal of Social Psychology*, **1**, 81-109.

Tajfel, H., & Wilks, A. L. (1963). Classification and quantitative judgement. *British Journal of psychology*, **54**, 101-114.

Stathi, S., & Crisp, R. (2010). Intergroup contact and the projection of positivity. *International Journal of Intercultural Relations*, **34**, 580-591.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Turner, R. N., Crisp, R. J., & Lambert, E. (2007). Imagining intergroup contact can improve intergroup attitudes. *Group Processes & Intergroup Relations*, **10**, 427-441.